

10 故郷の夢

—在京都朝鮮人留學生日記（1940～43年）にみる植民地経験—

板垣 竜太

1. 農村、都市、移民

夢を見たのだ。故郷の夢だった。今頃は故郷の夢が毎日見られる。一日も早く帰り度い気持でゐるからだらう。夢を見れば眠が坊〔妨〕げられるかしら。見る毎に朝遅くまでね過ぎてしまふから。（K氏の日記、1941年12月22日 = K411222）¹

この引用は、1925年に朝鮮の慶尙北道醴泉^{イェチヨン}郡の一村に生まれたK氏が、1940年から1944年にかけて京都に留学していた時に記していた日記の一節である。勉強のために、住み慣れた朝鮮の農村を離れ、宗主国の地方都市に異邦人として単身やってきたK氏が、故郷の夢を見て思わず朝寝坊してしまったことを綴っている。本稿の主人公はこのK氏であり、主たる研究対象は、彼が1940年から43年にかけて書き残した日記である。

私はこれまで2人の朝鮮人青年が書いた日記を素材に研究論文を書いた

¹ 本稿では、K氏の日記を引用・参照する際、Kに続く「yymmdd」の日付で示すものとする。K氏の日記の原本は民族問題研究所（ソウル）に所蔵されており、高麗大民族文化研究院HK事業団の企画研究チーム「個人の伝統と近代」（代表・鄭炳旭）の共同研究のために利用が許可されたものである。本稿はその共同研究の一環である。資料利用を許諾してくださった民族問題研究所、様々な協力をしてくださった研究チームのメンバーに感謝申し上げる。また、世界人権問題研究センター（京都）・研究第3部では、私の拙い報告に対して有益なコメントをいただいた。この場を借りてお礼を申し上げる。

ことがある。1人は醴泉の隣にある尚州^{サンジュ}という地域に生まれ育ったS氏(1914年生まれ)である。彼は1931年から38年にかけて主として農村で日記を書き綴った²。もう1人はソウル(植民地下では京城)に住む職工であったA氏(1921年生まれ)である。A氏が書き残した日記は1941年のみである³。3人の日記を対照してみれば、表1のとおりである。

表1 3人の日記の対照表

筆者	主居住地	日記期間	言語	満年齢	最終学歴
① S氏	農村(尚州)	1931～38年	朝鮮語	17～24歳	普通学校卒。中学中退。
② A氏	植民地都市(ソウル)	1941年	日本語	19～20歳	普通学校卒。養成所修了。
③ K氏	宗主国都市(京都)	1940～43年	日本語	14～18歳	普通学校卒。夜間中在籍中。

3人の共通点は、朝鮮でよく知られた知識人・政治運動家でもなければ、伝統的な漢文の素養をもった地方の士族系の知識人でもない青年男性であるという点である⁴。S氏はせいぜい尚州の農村の中堅人物という程度であるし、A氏は工場に勤める1人の職工に過ぎない。K氏は解放後に故郷で教員を勤めたとはいえ、この時点では1人の留学生である。またもう1つの共通点としては、かれらが普通学校を卒業しているということである。卒業後の進路についていえば、S氏は大邱^{テグ}という地方都市にある私立中等学

² S氏の日記については拙著『朝鮮近代の歴史民族誌：慶北尚州の植民地経験』（明石書店、2008年、5章）に詳しく書いた。

³ 拙稿「戦時体制下ソウルの職工日記（1941年）について」（油谷幸利先生還暦論文集刊行委員会編『朝鮮半島のことばと社会：油谷幸利先生還暦論文集』明石書店、2009年）。

⁴ 私がS氏を事例に、日記を史料とする論文を最初に発表したのは2003年のことである（『新旧』の間で：日記からみた1930年代農村青年の消費行動と社会認識』『韓国朝鮮の文化と社会』2号、2003年）。当時は、近現代の朝鮮半島を生き抜いた比較的「平凡」な人々の記した日記を対象にした研究はほとんど見られなかった。しかしその後、さまざまな資料発掘のおかげで研究の幅が広がってきている。

校に進学したが、金銭の問題で中退して帰郷した。A氏は、ある大工場の熟練工養成所での訓練を経て職場に配置された。K氏は故郷を離れ、京都の夜間中学へと進学した。1935年時点において、朝鮮人男性の就学率は36.7%、朝鮮人女性は9.9%という状況だったことを考えれば⁵、この3人は平均以上の学歴を持っていたと評価することはできる。

一方、3人の置かれた状況に違いもある。このうちS氏のみが農村部に住んでおり、他の2人は都市部に住んでいた。またS氏の日記は1930年代に書かれたが、A氏とK氏は1940年代の戦時体制下に書かれたものである。その結果として、たとえばS氏の記述のなかにはほとんど日本人が登場することはない。日中戦争勃発後には国家の存在が強まっているが、そのあたりで日記が終わっている。一方、A氏は職場や地域において総動員体制の様々な圧力が加えられている様子が見られる。ただし、A氏がソウルに住んでいる割には、日記ではそれほど日本人の存在が大きくない。ところが宗主国の都市に住んでいるK氏は日本人に囲まれて暮らしている。しかも戦時期において「大日本帝国」という存在が息苦しいまでに大きくなった状況に生きていた。

このように3人の日記を並べるところから本稿を書き始めたのは、単にそれらがたまたま私の接した資料だったからではない。農村史、植民地都市史、在外朝鮮人史をバラバラに叙述するのではなく、それらが相互につながっていたことを最初に示しておくためである。それも、それらがマクロな構造としてつながっていたというだけでなく、個人の経験や認識の次元においてもつながっていたことを示すためである。S氏は、都市に行きたくても行けない状況を次のように描写している。

⁵ ジェンダー別の就学率については、金富子『植民地期朝鮮の教育とジェンダー』（世織書房、2005年）を参照のこと。

私だって金銭さえたくさんあれば都会に行こう！ しかし金銭に困っているから行けないのではないか！（S氏の日記、1931年4月6日＝S310406）

S氏は農村にいながらも、ソウルから送られてくる新聞・雑誌などを頻りに読み、時に都市に対する憧れの思いを書き付けていた。しかし「金銭」の問題が彼の前に立ちはだかり、農村に滞留していた。彼は1936年に蚕業指導員という職を得るまで定職がなく、そのためか彼の日記には「時間の浪費」という表現がよくみられた。

これは当時、「農村過剰人口」と呼ばれた現象の一端だったといえる。植民地下における農村の窮乏化は数多くの離農者を生み出した。1920年代末の調査によれば、離農者の73%が朝鮮内の商工業等で働くことになった一方で、17%は日本（当時の「内地」）へと渡航し、2%は満洲へ渡り、5%は一家離散状態に追いやられた⁶。だが、行った先であるソウルをはじめとする朝鮮内の都市も労働市場が豊かなわけではなく、都市への人口集中が雇用可能な工業人口を上回る「過剰都市化」の状態が生じていた⁷。朝鮮半島内に行き先がない場合、海の向こうの日本や地続きの満洲が移住の選択肢としてのぼった。在日朝鮮人の推計人口は1927年の約30万から1935年には約60万と倍増し、1930年に約60万だった在満朝鮮人は1938年までに100万をこえた。その一方で、離村しようにも行き先のない農民の多くは農村にとどまり、農村過剰人口を形成したのである。すなわち、この時期の農村の窮乏および過剰人口、過剰都市化、朝鮮半島外への離散はひとまとまりの現象として把握する必要がある。実際、S氏には、近所の家主が「日本に金かせぎに行ったが病により死亡した」との消息が伝わっていた

⁶ 『朝鮮の小作慣習』朝鮮総督府、1929年。

⁷ 過剰都市化については橋谷弘『帝国日本と植民地都市』（吉川弘文館、2004年）を参照のこと。

し (S310803)、南満洲に行った知り合いが低賃金で暮らしていることを知って、「どうやって生きていくのか！」と嘆いてもいた (S310804)。S氏にとって、朝鮮内の「都会」はもちろん、「日本」や「満洲」のできごとは、まさに近所のできごとであり、自分の問題でもあった⁸。

本稿は、S氏が農村から遠く見ていた「日本」に住んでいたK氏の視点から植民地朝鮮を捉え直す試みである。彼は食いつめて日本に行ったわけではないが、後の記述からも分かるように、決して生活に余裕があって進学したわけでもない。彼は日中、京都の都市下層の労働市場で働き、その稼ぎで何とか夜間中学に通った。その間、彼は手紙や一時帰郷などを通じて故郷との紐帯を維持していたし、日本の他地域や満洲に散らばっていた親戚とも連絡をとりあっていた。かつて梶村秀樹は日本の植民地支配がもたらしたこうした関係のあり方をいみじくも「国境をまたぐ生活圏」と表現したが⁹、そうした生活圏が形成されていた一結果として、K氏は冒頭で引用したように故郷の夢を見たりもしたのである。その意味においても、彼の1つの小さな生き様は、明らかに日本の植民地支配によって形成された大きな構造のなかにある。以下、本稿では、まずK氏の日記の特徴および基本的なプロフィールを概観し、次に彼の京都における生活ぶりを叙述する。そのうえで彼と故郷との関係、さらに彼の日本観・朝鮮観などを検討する。

2. K氏とその日記

K氏の日記4巻の原本は現在、ソウルの民族問題研究所に所蔵されてい

⁸ この概要については、拙稿「朝鮮の地域社会と民衆」(山室信一他編『東アジア近現代通史第5巻 新秩序の模索 1930年代』岩波書店、2011年)で論じた。

⁹ 梶村秀樹「定住外国人としての在日朝鮮人」(『思想』734号、1985年。『梶村秀樹著作集』第6巻、明石書店、1993年所収)。

る(図1)。興味深いことに、K氏はどの年も全く異なる様式をもった市販の日記帳を用いている(表2)。その理由は不明である。S氏の場合はライオン歯磨本舗が発行していた日記帳を好んで使用していたが、K氏の場合は毎年敢えて異なる日記帳を試していたかのように思える。



図1 K氏の日記4巻

(備考) 右側から1940、1941、1942、1943年。

表2 K氏日記の基本特徴

年	日記帳標題	日記帳出版社	本文以外の記述項目等	特徴等
1940	昭和十五年 當用日記	國民出版社	天気、寒暖、今日の話、 予記、発信、受信	標題紙～4月2日、12月 19日～が欠落
1941	昭和十六年 當用日記	田中宋榮堂	天気、寒暖、特別記録 (1頁に2日分)	
1942	一日一想 心の日記	教育資料株式 會社	(日記本文のみ)	「誕生日一覧」および 「知人名簿」に記載あり
1943	昭和十八年 當用日記	博文館	天気、寒暖、予記	「補遺」に住所録記載

K氏にとっては日記本文を毎日記述することが何ととっても重要だったようで、日記帳の他の部分にはそれほどこだわりを持っていなかったよう

である。たとえば天気・寒暖の欄がある場合には、そこを必ずといってよいほど埋めていたが、そのような欄を有していない1942年の日記帳の場合、様式どおり本文しか書いていない。金銭出納簿などの付録がついている場合も、そこはほとんど記載していない。1942・43年に住所録を整理し、1942年の「誕生日一覧」に家族の誕生日を記入している程度である。

K氏は日本語で日記を綴った。S氏の場合は、主たる記述言語が朝鮮語であった。A氏は主に日本語で記述したが、わずかながらハングルによる表記が散見された。ところが、K氏の日記からはハングルが徹底して排除されている。その背景にはもちろん皇民化政策があっただろうし、K氏が留学していた同じ時期の京都で朝鮮語の詩作に取り組んでいた尹東柱^{ユンドンジュ}が治安維持法で逮捕され獄死したことを考えれば、「内地」で朝鮮語を用いることのリスクをK氏が感じていたと推察できなくもない。ただ、K氏の日記は「学生日記」に分類されるものの、学校教員らからの課題として記録をつけ、かれらの検閲を受けていたタイプのものとは異なる。K氏の日記は検閲の形跡が一切なく、あらかじめチェックされることを想定して書いているとは思えない。実際、後述のように独立思想と読めるような記述内容も登場する。むしろ勉学に励んでいたK氏にとって、日記が日本語の練習帳としての役割を有していたか、あるいは既に日本語の読み書きの方がやりやすくなっていたと考える方が妥当であるように思われる。いずれにしても、なぜ日本語で書くのか、そもそもなぜ日記を書くのかについてK氏が明示的には説明していないので、これ以上の推測は控えておく。

K氏がどのような人物か、分かる限りにおいて整理しておこう。K氏の出身地については、後述する帰郷時の記述から、慶尚北道の醴泉・尚州・^{ムンギョ}閔慶の境界に近い所であろうとの推測はつく。だが、日記のどこにもはっきりとは記されていない。実際に出身村が醴泉のS里であることが確定したのは、^{イソンスン}李松順氏が高麗大民族文化研究院HK事業団の企画研究チーム「個人の伝統と近代」の調査のために事前踏査した時のことであった。

彼女は、1942年の日記末尾（K19411231）に2度記された地名等を手がかりにS里に行き、幸運にもK氏を直接知っていた親戚G氏に会うことができた。彼女は、K氏が残念ながら1992年に逝去していたこと、夫人は市内で暮らしていること、解放後にK氏は教員をしたことなど、重要な事実を確認した。その後の2011年8月、私を含む研究チームでもう一度現地を訪問し、G氏に再度インタビューしたほか、夫人にも会ってアルバムの写真を見せていただくなどした。そうした過程を経て明らかになったK氏のプロフィールの概略は以下のとおりである。

S里はK氏のある一派の集姓村である。現在もこの一族の入郷祖（当該地域に初めて定住した祖先）らの墓や、その墓祭をとりおこなうために用いられる齋室がS里で保存されている（図2）。朝鮮時代に名の通った人物を輩出したわけではないが、1995年に齋室を重修（改築）しており、墓碑銘を大韓民国初代文部部長官・安浩相^{アンホサン}の名義で刻むなど、相当の結束力を維持してきた。1930年代の調査によれば、S里にはK氏と同じ姓をもつ家が59戸集まって住んでいた¹⁰。K氏の出生年については、1942年の「誕生日一覧」において、「自分」の誕生日として「大正十四年十二月十二日」、すなわち1925年12月12日と「甲子十月二日」、すなわち1924年10月2日の2つの日付が記されている。彼が教員生活を終える頃に開かれた「停年退任式」（1991年2月）の配布資料には前者の日付が印字されている。おそらく実際の生まれが1924年であり、戸籍上の誕生日が1925年なのであろう。同「誕生日一覧」では祖父・父・母の誕生日のみが記入されており、実際、K氏は一人息子であった。K氏が生まれ育った家には今は誰も住んではいないが、建物自体はまだ残っている（図3）。

K氏は地元の普通学校に1933年入学し1939年に卒業した。前掲の停年退任式配布資料によれば、1940年4月から1944年3月まで京都の立命館第四中

¹⁰ 善生永助『朝鮮の姓』（朝鮮総督府、1934年、附録）。



図2 K氏一派の齋室

筆者撮影



図3 K氏の生家

筆者撮影

学校に通った(図4)。立命館第四中学校とは、立命館夜間中学校が1943年に改称したものである。『立命館百年史』によれば、立命館中学校は1924年に上京区(現・北区)小山上総町に移転した。位置としては現在の地下鉄北大路駅の西側であり、今は立命館小学校が建っている位置にあたる。立命館夜間中学校が、「昼間に於て中学校教育を受け能はざるもののために」立命館中学校に併設されたのは1937年のことであった¹¹。残された日記はこの夜間中学校に通っていた時代のものであり、この時期の経験については次章以降で詳しく検討する。

G氏によれば、K氏を心配した両親と祖父は病気の報せを京都に送り、K氏はそれで帰郷した。ところがそれは仮病であった。それでも彼はそのまま学校をやめ、故郷に残ることになったという。K氏の遺族が立命館中学校に確認したところによれば、彼は1940年4月8日に第1学年に入学し、1944年3月8日の第4学年まで在籍していた¹²。立命館夜間中学は入学資格が尋常小学校卒業、修業年限5年だったので¹³、中途退学したということになる。

K氏はその後、1944年11月から1946年6月まで、S里の近くの金融組合書記として働いた(図5)。彼は初等学校教員を速成で養成する講習所に通い、1946年10月から1970年2月まで教師、1970年3月から退職する1991年2月まで校監(教頭)を務めた。彼は45年近くにわたる教員生活をやめて間もない1992年、病により逝去した。子どもは4男3女であり、いずれも韓国で活躍した。

京都での4年間の生活は68年間のK氏の人生にとってほんの一コマに過

¹¹ 以上は立命館百年史編纂委員会『立命館百年史』(立命館、1999年、通史1、376-379頁および563頁)。

¹² 韓国に住むK氏の遺族は学籍簿等の本人資料の複写を立命館中学校に郵便で依頼したが、個人情報保護のためその要求が認められず、在籍証明書のみが発行された。

¹³ 前掲『立命館百年史』通史750頁。



図4 学窓時代の K 氏と
その友人



図5 金融組合書記時代

(出典) K 氏自宅所蔵アルバムより

ぎない。だが、退職後間もなく夫婦で京都に旅行するなど、彼が格別な思いをもっていた場所であったことも確かであろう。以下検討するのは彼の苦学生時代の経験である。

3. 苦学生活

3-1. 京都における朝鮮人の就学と就労

K 氏の日記は1940年4月3日から始まっている。1月1日から4月2日までの頁自体が欠落している。日記の冒頭では既に京都に住んでおり、4月8日にはもう立命館夜間中学校の入学式を迎えるため、なぜどのようにして京都に来ることになったのかについて記述がない。ただ、K 氏がまず西陣織の賃労働をしていた親族を頼って京都の西陣地域に来たことはほぼ確かである。日記では単に「叔父」と書いているが、文脈からして外三寸^{ウエサムチヨン}〔母方の叔父〕のことだと思われる。情報を総合すれば、外三寸とその家族は西陣

の翔鸞学区のある路地の家で間借りしていたと考えられる(図6)¹⁴。1935～36年に京都市社会課が京都市在住朝鮮人を網羅的に調査したところによれば(以下「京都市調査」と略称)、翔鸞学区の朝鮮人世帯数は171(全世帯の4.9%)、人数は392人(全人口の2.5%)であった¹⁵。当時、京都で朝鮮人が最も密集していた西陣の楽只学区(世帯比率20.6%)に比べれば少ないが、近所のあちこちに同胞がいた状況ではあった。K氏は書いている。「此の西陣は織物で著名である。何所の家からも機を織る音がちゃかっゝと聞える。又半島人も多く此れに従事して其数も大なり」(K400403)。こうして彼の京都生活は機織りの音と共に始まった。

京都市調査によれば、労働従事者8,154人のうち「内地」に渡来した理由は、朝鮮における生活困難34.1%、求職出稼ぎが31.2%、金儲け14.1%と、経済的理由を掲げる者が合計約8割に達していた。勉学目的は全体の1.4%ほどに過ぎなかったが、K氏はその貴重な一例に当たる。K氏のように渡航時に京都に縁故があった者は64.9%で、全く縁故のなかった29.3%よりもずっと多く、いわゆる連鎖移民(chain migration)が形成されていたことが分かる。縁故があった者のうち知己友人を頼った者は62.9%、家族・親戚が35.3%(家族20.2%、親戚15.1%)であった。これは労働従事者のみの統計

¹⁴ まず叔父宅の最寄り駅は「今出川電停」(K400709)と記されている。「今出川」の名称が付く市電の駅はいくつかあるが、立命館中学校(烏丸車庫前駅)に通学するルートということでいえば千本通一北大路通を用いたものと考えられ、そうであれば千本今出川駅であったと推測できる。また、1942年の住所録に「外家」として「六軒町一条上ル」といった通り名が記されているが、その地域であれば市電の最寄駅が千本今出川駅となる。なお、1933年の調査によれば、上京区の西陣賃織業者4,937世帯のうち、実に4,789世帯(97.0%)までもが借家に住んでいた(京都府方面事業振興会『西陣賃織業者に関する調査』社会調査第2輯、1934年、138-139頁)。

¹⁵ 京都市社会課『市内在住朝鮮出身者に関する調査』(調査報告第41号、1937年)。この調査は、区役所の寄留簿および警察署の戸口簿から抜き出した朝鮮人全人口31,143人(警察戸口簿による)を対象に実施したものである。有効回答は7,422世帯、26,550人という非常に大規模な調査である。



図6 K氏が最初に住んだと考えられる路地

筆者撮影

なので、随伴者を含めれば家族・親戚の割合はもっと高くなるであろう。

夜間中学校は毎年の募集定員が100名であり、K氏によればそのなかに「我が半島同胞も大部居る」(K400413)とのことであった。京都市調査によれば、7～17歳児童のうち初等学校の不就学者は44.3%にのぼっていた。全市調査では1.1%だったことと比べれば、朝鮮人の不就学率の高さが際立っていた。また、7歳以上の朝鮮人で中学校以上の卒業・在学・中退の学歴を持っていた者は4.8%に過ぎなかったので、K氏の学歴は典型的とはいえないことには注意が必要であろう。ただ、K氏の同郷の2人が1941年に京都にやってきて、それぞれ東洋クロスと染工場で働きながら上級学校に進学していたことからして(K411019)、珍奇な事例でもなかった。

学校は通常、月曜日から土曜日の夕方6時頃から夜9時半頃まで4校時分の授業があった。後述のようにK氏は職場を転々としていて、生活リズムが一定してはいないが、日中は働き、夜には学校、帰ってきてからは入

浴等をしたり、日記を書いたり、少し余裕のあるときには少し勉強をしたりして、最後は疲れ切って就寝するという調子だった。それでも、彼は勉学が主で職業はその手段という意識があったようだ。たとえば彼は「俺はお金の為めにお金の奴隷となって働いてゐるものではない。俺は学校の為めに勤めているのだ」と明記している (K420913)。また後述のとおり、転職を決意する際には「勉強する暇無いのがつらい」(K410426)、「兎に角大阪より京都へ通学は無理だと僕は決心」(K430902)と、仕事が勉学の支障になることをその動機として挙げている。

K氏は1940年には授業料として毎月3円50銭、校舎寄附として50銭、校友会費50銭など合計約5円を月謝として支払っていた (K400417)。彼は「月十五円位あれば学校は行けると思ふ」と判断していた (K400630)。K氏はあまり月給の金額を日記に書いていないので、どれほど足りていたのかは分からないが、月末に10円しかもらえなかった時には「やって行けられんかも知らぬ」と感じていた (K400830)。京都市調査によれば朝鮮人の平均月収は30.2円、月収10円以下の者は9.2%であったので、さすがにこれでは勉学しながら生活を維持できる水準ではなかったであろう。1941年からは納付金が7円50銭に値上がりしたので、彼は「高すぎる」とぼやいている (K410414)。故郷に送金していた様子もなければ、故郷から仕送りをされていた様子もほぼなく、自らの必要な資金を自ら稼いでいたと見られる¹⁶。

京都市の朝鮮人の有業人口を職種 (小分類) 別に上位8位まで表3に整理した。これは1930年の国勢調査によるものなので、K氏が来た時代には多少変化していた可能性がある。これを日本の他地域における同時期の統計と比べた高野昭雄が指摘しているように¹⁷、染色・捺染・機織といった紡績業、より具体的には友禅染や西陣織などの京都の「伝統的」な繊維産業

¹⁶ ただし帰郷の旅費として10円の為替を送ってきたことはあった (K400719, 25, K411226)。

¹⁷ 高野昭雄『近代都市の形成と在日朝鮮人』(人文書院、2009年、92-98頁)。

表3 京都市における朝鮮人の職業（1930年、有業者計9,486人）

順位	職業（小分類）	人数	%
1	染色工・捺染工	1,526	16.1%
2	土工	985	10.4%
3	雑役夫	697	7.3%
4	機織工	665	7.0%
5	店員・売子	518	5.5%
6	捺糸工	286	3.0%
7	日傭	273	2.9%
8	配達夫	254	2.7%

（出典）内閣統計局、1930年度国勢調査報告書（高野昭雄『近代都市の形成と在日朝鮮人』人文書院、2009年、94頁所収）より抜粋

に比較的多くの朝鮮人が従事していたのが京都市の特徴であった。戦時期になると人手不足、軍需関連工業の肥大などにもない、戦時動員政策にまきこまれた者を除けば、全体としては在日朝鮮人の就業機会が拡大したという研究がある¹⁸。「職工募集＝但し日本人に限る」といった広告も京都では1939年頃にはなりをひそめたとする史料もある¹⁹。その一方で後述のように、1940年7月以降に西陣織等が贅沢品として生産できなくなっていくなど、就業機会の縮小した業種もあった。いずれにせよ K 氏が飛び込んだのは、そのような戦時下で再編を迫られた都市下層であった。

3-2. 職場を転々と

K 氏は職場を転々とし、4年のあいだに少なくとも7つの仕事に就いている（図7）。ここでは彼の就労の不安定さと苦学の様子をみるために、その仕事の内容や転職の動機およびプロセスなどを見てみよう。

¹⁸ たとえば、外村大『在日朝鮮人社会の歴史学的研究』（緑蔭書房、2004年、315-318頁）。

¹⁹ 衣川利三次「内鮮一帯協和事業雑感」（『社会時報』9(8)、1939年）。



図7 京都における K 氏の軌跡

①西陣織物業（1940年4月～7月）

K 氏が頼った叔父の家は、西陣で間借りをし、西陣織物業の工程の1つを家内賃労働としておこなっていた様子がうかがわれる。作業内容は断定できないが、「～枚切る」や「針」といった表現が多発していることから、ビロード（ベルベット、天鷲絨）の「線切り」工程を請け負う仕事に携わっていたと推測される。ビロードは針金を織り込んだうえで、針金の上の糸を小刀で切って起毛することでできあがる。K 氏は叔父の家で請け負ったビロードの「切り」の工程を手伝うところから京都生活を始めたと考えられる。枚数をしばしば数えていることから、出来高制で仕事を請け負っていたと判断される²⁰。

²⁰ 京都市社会課の調査（『西陣機業に関する調査』調査報告第44号、1938年、32頁）によれば、ビロード（天鷲絨）は1段＝1尺1寸を単位として工賃が定められていたという。K 氏日記では、32枚で9円60銭との勘定が記されており（K400430）、1枚30銭で請け負っていたとみられる。

当時、西陣織物業、特に賃織業には数多くの朝鮮人が携わっていた²¹。1933年における上京区の西陣織業者約8千世帯のうち賃織業者は4,937世帯を占めていたが、その出生地別の内訳をみると、朝鮮出身の世帯主は49名（世帯主全体の1.0%）、朝鮮出身の賃織傭人は126名（傭人全体の21.5%）であった²²。なかでも、ビロードは戦間期に朝鮮人の安い賃金に目をつけた業者が西陣に持ち込んで定着したものといわれ、1937年の調査では「最近織手の中、半島出身同胞数が内地人のそれを凌駕する関係にある」と報告されている²³。

ただ叔父宅での手伝い生活は長く続かなかった。叔父が「僕の残りの仕事などで本職が一つも出来ぬ」という理由から、親戚を通じて、寺之内通にある切り専門の日本人織物業者に世話することになったためである（K400612, K400613）。初めて日本人宅の飯を食べることになり、最初は「今まで沢山なおかずで食へてみた」のに「内地人は何でも一菜で食べる」と質素な日本の食生活に不満もこぼしたりもした（K400614）。

ところがこの仕事も辞めざるを得ない状況に追い込まれた。奢侈品等製造販売制限規則が1940年7月7日より施行され（7.7禁令）、豪華な西陣織は贅沢品として製造や在庫品の販売が厳しく制限されたためである。このニュースを知ったK氏は早速「先生に職を一つ頼んでおいた」と学校経由で転職の準備を始めた（K400706）。7月16日からは「約2週間休機」となり、仕事が休みとなった。7月28日にはまた休機のニュースに接し、K氏は転職を急いだ。まず新聞に載っていた給仕採用の広告を見て行くが、男は採用しないと断られた（K400801）。千本通にあった店員募集の広告を見て訪ねたのが、四条烏丸の大丸百貨店前の植村文具店（現存せず）であっ

²¹ 詳しくは、高野昭雄「戦前期京都市西陣地区の朝鮮人労働者」（『世界人権問題研究センター研究紀要』第14号、2009年）を参照。

²² 前掲『西陣賃織業者に関する調査』6-13頁。

²³ 前掲『西陣機業に関する調査』37頁。

た (K400802)。翌日採用が決まり、8月4日より勤務することになった。

京都市調査によれば、公私設の紹介所を通じて就労する朝鮮人は8.9%に過ぎず、最も多いのは友人・知人の紹介で就労した者55.4%であり、ここに家族・親戚の4.2%を加えれば約6割が縁故を頼って採用されていた。ただK氏のように直接職業を開拓した者の割合も24.0%はいた。K氏の場合、ちょうど立命館夜間中学の3年に在学していた別の朝鮮人留學生が辞めるタイミングだったため、その後任として採用されたようである (K400804, 05, 07)。

②四條烏丸の文具店 (1940年8月～1941年5月)

植村文具店でのK氏の仕事は、まず朝7～8時の開店、物の陳列、店の掃除、雑誌や文具等の配達やその集金、そして夜10時の閉店などであった。住込で雑務を任せられる、いわゆる丁稚となったわけである。ほかにも共に住んでいる朝鮮人の名が見え、複数の丁稚を雇っていたと考えられる。店は日曜も開けており、ほとんど休みの日は見られない。配達は自転車で京都市内各地に行っていた。雨の日も「身は例へ曝されても品物には濡らせまいと夢中」になって配達した (K401014)。寒くなると「手が大へん冷たく、ひびが出来る」(K401112)。故郷ではおそらくオンドルに慣れていたK氏にとって、初めての京都の家で迎える冬は寒く、「寒くて勉強も出来ぬ」ほどであった (K401202)。疲れがたまると、「学校で授業時間中、頭が痛くてねてしまった」日もあった (K410304)。勉強もできず学期末試験もうまくいかず、「非常に残念に思ひ握^{ママ}〔拳〕を固く握りしめた。此処に来てゐるのは何が為であらうか」と歎いたりもした (K410308)。成績通知を受け、「ああ父母に対して申訳がない。ゆるして下さいませ。ああくやしい」と書き付けた (K410328)。

彼は間もなく転職を決意した。「ああ此の丁稚はつらい。一日に何度此の仕事は止めやうと誓ふか分らない。断じて此度こそ転職致すべく決心す。〔…〕勉強する暇無いのがつらい事ぢゃ」(K410426)。早速、下立売通に住

む朝鮮人の友人C氏の所に行ったところ、そこの主人が「何時にてもかまはぬから来て呉れ」と言ってくれた(K410427, 28)。彼は、住込の乳製品配達の仕事に転職した。

③乳製品配達(1941年5月~1942年1月)

今度の仕事は、朝に乳酸菌飲料「ヴァリー」を小瓶に詰め、配達し、その後回収した瓶を洗うという単純な作業であった。この業者は不明だが、「自分等勝手に乳酸菌組合を名乗」っているだけで「未だ府でも認めていない」と記述されている(K420110)。午後3時か4時ぐらには仕事が終わるので、勉強する時間は確保できたようである。日記も日々の苦しさよりは、時局の記述が増えてくる。ただ7月の学期末テストの成績はふるわなかった。「僕はやって見せるぞと歯を喰ひしばった。〔…〕此では母校恩師に見せられぬ」(K410724)。

新たな仕事の月給には不満だったようである。給料日になると「すっかり働く気が無くなった」(K410731)、「いやになって来た」(K410831)と愚痴を書き、「給料から授業料を取り去れば、小遣も優に出来ず」(K411002)ともぼやいていた。そのうち統制経済の影響を受け、「瓶数大そう減るので此の商売嫌にな」り(K411204)、さらに「台湾には砂糖あるも其れを運ぶ船舶が無い」といった事情から原料不足で乳酸菌飲料が十分に作れなくなり(K420107)、宅配が無く卸売のみになった。そして姑従妹〔父方の従妹〕の結婚と陰暦の正月を兼ねて帰郷することになったのをきっかけに、この仕事を辞めることにした。この帰郷については、次章で記す。

④西湖堂印刷所(1942年3月~9月)

1ヶ月ぶりに故郷から京都に戻ってきたK氏は、再び西陣の叔父宅に身を寄せた。だが居候の生活が気まずいので、植村文具店の主人に紹介してもらい、西湖堂印刷所(高倉通四条下ル)に丁稚として入ることになった(K420325)。この印刷所は5台の印刷機をもち、十数名の植字工を雇っていた合名会社であった(K420326, 27, 29)。実は現在も同じ場所において、K

氏が描写したとおりの建物で西湖堂印刷所は経営を続けている（図8）²⁴。K氏は熟練を要する植字の作業には携わず、電話番、配達、集金、掃除などの雑務をまかせられた。



図8 西湖堂印刷所

筆者撮影

²⁴ ホームページもある（<http://www.saikodo.com/>）。K氏がいた頃が初代社長であり、その娘の息子（外孫）が現社長である。現社長の幼い頃には、確かに住み込みで働いていた人がいた記憶があるという。残念ながら、従業員名簿などは残っていないそうである。

だが、この仕事も長続きしなかった。理由ははっきりしないが、丁稚という地位がそもそも気に入らなかったようである。K氏の辞意を聞いた主人が「成可く辛抱して呉れ、給料の件も考へるから」と言ったのに対し、彼は「如何なる特典を与へて呉れても此の様な丁稚地位に於ては仕方がないと思ったからきっぱりと断つてやった」と書いている（K420928）。彼は「同級の友人の紹介に依り」、日本紡績新聞社に勤務することになった。

⑤日本紡績新聞社配達員（1942年10月～1943年4月）

日本紡績新聞社京都支局（京都市下京区烏丸五条下ル）は、日本紡績通信社を前身とした紡績専門の『日本紡績新聞』を発行しており、K氏の記述によれば「紡績関係の各種商店会社等」を購買範囲とし、京都では2千部配布していた（K421003）。K氏はこの配達員として働いた。朝、京都駅に届いた新聞を取りに行き、折り、自転車等で配布するのが主要な仕事であった。

この配達員の仕事も、戦時統制にとまなう業界統合によって失うことになった。1942年中にも統合の話（K421101）があったが存続し、最終的に繊維製品統制協議会の機関紙として統合されることになった（K430331）²⁵。それを受けてK氏は30円の退職金をもらって辞めることになった（K43040416）。次の職場は、この支局が看板を下ろした後に入ってきた関連会社と思われる大阪鋼化工業所の京都出張所であり、そこに何人かの同僚とともに移ることになった。

⑥大阪鋼化工業所勤務（1943年5月～9月）

新たな職場は軍需品を取り扱う工業所であった（K430517, 26）。職務が定まらずラベル貼りや電話番号など様々な雑務をさせられたが、月給は45円とそれなりに高かった（K430627）。最初は京都出張所で勤務していたが、8月

²⁵『日本紡績新聞』はまだ所蔵が確認できていないが、繊維製品統制協議会の機関誌『日本繊維新聞』については縮刷版が発行されている（京都府立図書館等に所蔵）。1943年4月29日付の第1号においては、これが「業界唯一の新聞紙」であると記されており、K氏の記録のとおり業界紙が統合されたことが間接的に裏付けられる。

から大阪の工場に通勤することになった (K430803)。夏という季節に加え、熱処理をおこなう工場であり相当暑かったようである。仕事のきつさや上司・同僚への不信感もあって、「我今度の大阪移転は今にして見れば大なる失敗なり。苦学者の運命は斯くも脆きものかな」と考え (K430826)、また「兎に角大阪より京都へ通学は無理だと僕は決心」し (K430902)、友人とともに荷物をまとめて「総撤収」した (K430912)。

⑦不明の会社 (1943年9月～)

K氏は北区の上善寺の近くに住んでいた朝鮮人の友人の下宿²⁶に同居し、そこからまた新たな会社に通勤しはじめた。会社名、業務内容等に関しては、京都大学の事務室に「消毒料値上承諾を受ける為に」行くとか (K431102)、防空演習等に際しての「巡回」の仕事といった表現があるものの、明確な記述が無いのでよく分からない。給料のことや社主である「親爺」に対する不満だけは明確に記されている。日記の最後の方は尻切れトンボで終わっているが、少なくとも1943年の終わりまではこの仕事を続けたものと思われる。

以上、7つの仕事を転々としながら苦学していた様子を描写した。表4にここまでの叙述をまとめた。平均在職期間6.4ヶ月という短期間に低賃金の非熟練労働市場を渡り歩いていたことになる。京都市調査では、最も在職期間の短い徒弟見習・使用人であっても平均2年2ヶ月だったので、それよりもさらに短かった。戦時期の雇用縮小の影響も受けていたし、勉学優先という彼の信念もあったし、彼が家計を支える立場になかったという事情もあっただろう。ただ、初等以上の教育を受け、日本語もできた学生だったためか、土工などの肉体労働は含まれなかった。これほど職場を変えて

²⁶ この下宿屋を営んでいた家は戦後改築し、2012年現在では当時の主人の嫁や孫が住んでいた。かつては下宿専門でやっており、中に食堂などもあったという。

も、収入の空白期に彼が路頭に迷うことは一切無かった。それは制度的保障があったからでも彼に余裕があったからでもなく、ひとえに朝鮮人の親族や友人などによるインフォーマルな社会的セーフティ・ネットが存在していたためである。彼が異国の地で生存していくうえでほとんど唯一の財産ともいえるものがそうした同胞ネットワークとでもいうべき社会関係資本 (social capital) であった。これについては次章で検討しよう。

表4 K氏の転職状況

番号	始	終	職場・場所	仕事内容	居住	就職経路	退職動機・背景
①	40/04	40/07	西陣織 (叔父宅→寺之内通)	ピロードの切り作業	叔父宅	親戚およびその紹介	奢侈品統制による雇用減
②	40/08	41/05	植村文具店 (四条通高倉西入)	丁稚	住込	広告	勉強ができないため
③	41/05	42/01	下立売通	乳酸菌飲料の配達等	住込	友人の紹介	低賃金および統制経済による生産減
④	42/03	42/09	西湖堂印刷所 (高倉通四条下ル)	丁稚	住込	植村文具店主人の紹介	丁稚身分への不満
⑤	42/10	43/04	日本紡績新聞社 (烏丸通五条下ル)	配達員	住込	学校友人の紹介	戦時業界統廃合による会社の閉鎖
⑥	43/05	43/09	大阪鋼化工業所 (烏丸通五条下ル→大阪工場)	雑務	住込	前職場の紹介?	大阪勤務で勉強ができないため
⑦	43/09	—	不明	不明	友人の下宿	不明	—

4. 離郷した朝鮮人の紐帯と想像力

前章に記したのは、京都における K 氏の活動であった。しかし離郷者としての K 氏の動きは京都の中に限られていたものではないし、また彼の人的ネットワークや想像上の地理は居住地域をはるかに越えて展開していた。ここではまず K 氏にとっての同胞ネットワークの広がりや機能、

故郷との紐帯などについて検討したうえで、彼の朝鮮や日本に対する認識を分析してみよう。

4-1. 同胞の紐帯

K氏日記を見ていると、仕事や勉強以外の場面でほとんど日本人が登場しないことに気づく。配給などに関連して町内会などにも接していたようだし、隣組に入っていた様子が見られる時もあるが²⁷、ほとんど日本人の痕跡がない。休みの日などプライベートで登場する人はほぼ全て親戚か朝鮮人の友人であった。もともと知っていた人だけでなく、初めて会った朝鮮人であっても安心感を抱いていた様子も見られる。たとえば同居している朝鮮人の友人をその旧友が訪ねてきた時にも、「異郷の地で同胞と逢ふことは何よりも心強く非常に懐しいものである」と書いている（K430524）。これはK氏に特殊なことではなく、戦時期においても「多くの朝鮮人は、主として民族的な社会的結合の下で生活を送っていた」と外村大は指摘している²⁸。

K氏にとっての同胞間のつながりは様々なレベルがあったが、なかでも衣食住という生活の根幹において最も頼っていたのが京都・大阪に住む3軒の親族であった。ここではそれらを便宜的にK1、K2、K3と呼んでおこう。

K1は前章に登場した西陣に住む外三寸〔母方の叔父〕宅である。京都移住初期に身を寄せただけでなく、その後別の店で住み込みをしていたときも度々その家を訪れていた（K401006, 18）。郵便の受取先にもしていたようで、学校の通知簿をはじめよく物を取りに行っていた。1942年の故郷帰省後に1ヶ月ほど住んでいたのもこの家であった。

²⁷たとえば外食券をもらうのには町内会を通して（K430915）。また1943年の「補遺」欄には紫明町内会聯合会のある隣組の名称が記されている。

²⁸外村大・前掲『在日朝鮮人社会の歴史学的研究』318頁。

K2は京都の山科に住む叔父（おそらく父方）の家であり、K氏が休日などによく泊まりに行ったりしていた。叔父と従兄は土方をしていたと思われる（K420317～19）。故郷に帰省するにあたって20円を貸してくれたこともあったし（K420203）、教科書購入という目的で30円を貸してくれたこともあった（K420331）。

K3は大阪の枚方に住んでいた姑母〔父方のオバ〕の家である。姑母家は米農業をやっていたようである（K411130）。「姑母家位愛想のよい所はない」（K420302）と評価しているように、訪ねると鶏を1羽つぶして食べさせてくれるなど（K410816）、いつも歓待してくれた。農家であったため、親戚が食糧統制をかいくぐって白米を買いに来たりもしていた（K430103, 04）。配給米が不足していたK氏も、こっそり米を持たせてもらったこともある（K430105, 31, K430321）。

京都・大阪以外の地域にも親族は広がっていた（図9）。その様子を書簡のやりとりを通じて見てみよう。表5はK氏の1年間における手紙送受信の内訳である。最も頻繁に手紙の送受信を記録していた1940年に限って整理した。故郷である醴泉、特に残してきた家族への手紙がやはり多い。これについては後述することにして、この表で1つ目立つのは満洲における親族である。K氏は「叔父」と表現しているが、祖父が一度訪ねていていることからして（K430112）、K氏の父の兄弟であったと考えられる。やはり郵便事情の問題もあって、「満洲の叔父が四ヶ月程消息無いので心配である」とし（K410209）、その後、「満洲に居られる三寸叔父様より手紙の返事着皆無事とのこと」と安心する様子も見られる（K410326）。このほか東京にも親族がいたし、手紙のやりとりはないものの北九州の折尾にあった日炭高松炭鉱にも叔父が鉱夫として働いていた。K氏は1度この炭鉱を訪ねたことがあり、「二階建のバラックで数十棟並んでゐる」ことや、「縷々事故が発生するらしい」ことなど、生々しい状況を描いている（K420227, 28）。

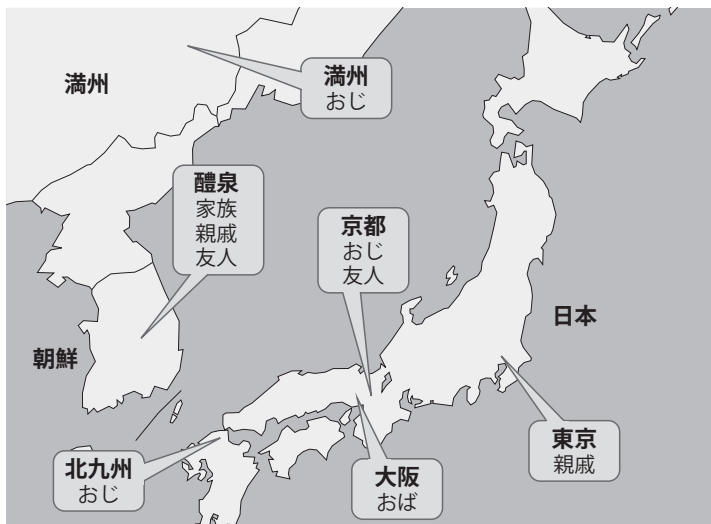


図9 K氏の朝鮮人ネットワーク

表5 K氏の書簡送受信数（1940年）

地域	計	行政区域	相手	数
朝鮮	31	醴泉	家族	14
			親族	8
			友人	6
			恩師	1
		他地域	友人	2
満洲	5	—	親族	5
日本	14	東京	親族	7
			親族	3
		その他	—	4
不明	3	—	—	3

こうした朝鮮人社会のなかでは、同化政策が極度に強まった戦時期においても、朝鮮の慣習が様々なかたちで維持されていた。たとえば、姑母の家の従妹が結婚することになった。最初は「朝鮮でさせようか内地でさせようかと迷っている」と話していたが（K420103）、「急に姑従妹の婚事が定まった」ため、K氏は大阪へ行った（K420122）。親戚・知人が数多く訪ねてきて騒がしく酒を飲み、「親戚のバラック」へ行って寝た（K420128）。新郎新婦の初夜には「朝鮮の習慣で初めの晩等は新郎新婦のね間を覗くのが常であった」とし、覗きに行った（K420129）。

祖先祭祀も正月などに実施していた。K1家では1943年に陽暦で正月の祭祀をおこなったが（K430102）、K氏は同じ年の旧正月に職場の朝鮮人の友人とともに「朝起きて二人は故郷の遙かな空を仰いで父母様や一家一村否鶏林十三道の将来や安康を祈った」（K430205）。年中行事だけでなく、後述のとおり、料理もこの時期に維持していた様子が見られるし、「酒を醸す」（K400428）とあるように自家用のマッコリもこっそり醸造していた。後述のように食生活でも朝鮮料理を食べていた様子がうかがえる。

K氏を含む渡日1世の時代においては、故郷との紐帯も非常に堅固なものがあつた。特に運良くも収入の余裕があつた家においては、故郷に送金などをしていた。たとえば、K1宅については、「本当に叔父さんの家は内地でお金を儲か^マつた。今度も水田八反を買入れて来た^マと云ふ」（K400501）とか、「収入が多いので毎年十斗洛以上の田地を購入することが出来る」（K430622）とある。また、山科のK2宅にいる時に会つた親戚は、「鐘紡の石炭灰取りの仕事」をしており、「今度半年で七百円故郷の父母へ送つた」としている（K420102）。

といつても送金できるような地位になつたK氏が故郷にもつぱら送つていたのは手紙であつた。ある時には母宛に「手紙用紙に長々と一米位の長い手紙を書いた」こともあつた（K420714）。しかし、疲れた体では1通書くのも難儀していた。例えば祖父宛に手紙を「書き掛け」（K410727）、翌日

も「身が疲れて手紙を書かうと思へども仲々にて書けず」(K410728)、数日かけて「漸く書けた」という時もあった(K410731)。ごく稀に頼まれた暦を送ってあげたり、従弟に雑誌を送ってあげたりもしていた(K421228)。おそらく故郷では受け取ったK氏の手紙を朗読していたと思われる。漢文以外の文章には慣れていなかったと考えられる祖父は代筆で手紙をK氏に送っていたし(K430207)、母単独名義での書簡は見えず、常に父を通じて手紙を書いていたと考えられるからである。故郷から送られてくるものはほとんど手紙だったが、母から手製の布団が送られてきたこともあった。そのときK氏は「母上様の御許に寝る気がした」と嬉しさをあらわにしていた(K421105)。

手紙を受け取った時だけでなく、京都生活のなかでもK氏は折に触れて故郷のことを思い出していた。暦を見ては、「昨日は我が旧の元旦である。故郷の父母の御健康をお祈り奉る」と思い出した(K410128)。正月早々働かなければならない自分と対比して、「故郷では未だお正月気分が愉快地遊んでゐられると察する」と思い描いた(K430113)。体調が悪いと、「あゝ痛い。故郷が恋しくなる…」と望郷の念に駆られた(K400422)。京都の天気を見ても、故郷の天気を想像した。久しぶりに降る雨に「作物はどんなに喜ぶだろう。我故郷でも降って来れよ!! 曇る度毎に朝鮮にも雨の降らんことを!!」と農村を思いやり(K420803)、秋晴れの朝空を見ては「此の朝の崇高なる気持を少しでも故郷の父母と分けたい気分が胸一ぱいに」こみあげてきて(K421020)、寒くなってくると「此の寒さに如何にましますや」と心配するのであった(K421116)²⁹。

故郷への思いを募らせていたK氏は、4年の間に2度だけ帰省した。1回

²⁹ K氏にはこの時点で故郷に残してきた妻がいたようだが、日記にはほとんど登場しない。「勉学中に結婚は絶対禁物だ」との父の言を思い出した時や(K411215)、帰郷時に「妻を一人家において出るとは甚だ世間観から不穩当」と父が言っていたとの記述(K420224)で出てくる程度である。

目は1941年の陽暦正月をはさむ時期（1940. 12. 17～1941. 1. 11）であり、2回目は1942年の陰暦正月をはさむ時期（1942. 2. 3～3. 3）であった。正月であったためでもあったが、帰ると父母や祖父だけでなく、外家〔母方の家〕、妻家、姑母宅、従祖母宅、母校など様々な家を回った。帰ってくるとK氏は「朝鮮の服を纏った」し（K420218）、餅を食べてユンノリで遊ぶなど（K42022）、どっぷりと朝鮮文化に浸った。だから故郷を去らなければならない時には、「故郷のなつかしさを胸に抱き乍ら再び萬々と他国へ赴くのである。如何にも残念でたまらない」と感じたし（K410111）、泣き崩れる母の姿を思い出しては「あ、お母さま！お機嫌よう…」と記したのである（K420224）。

このように醴泉のことを常に胸に抱いていたからこそ、K氏は本稿の冒頭で引用したように故郷の夢をよく見たのである。「楽しい夢路を、心は故郷へ」（K410902）。「此頃は一寸夢を沢山見る。何時も故郷の事殊に祖父様の事が多し」（K410904）。「此頃は故郷に帰る夢を見る事が多い。何時も憧れてゐる為であらう。「父上様、母上様、祖父様、御機嫌宣敷おはしませ」と祈る」（K421111）。それでもK氏には再び故郷に戻って役に立つ人物になりたいという思いをもって、京都で生活を続けた。彼は故郷に錦を飾る決意を書いている。「あ、懐しき故郷よ。〔…〕我錦を着なば汝に逢はん。」（K411008）

4-2. 朝鮮、日本、戦争

最後に、ここまで述べてきたような生活のなかから、K氏が朝鮮や日本に対してどのような認識を抱いていたかについて検討してみよう。ほとんど日本のことを明示的に語っていなかったS氏やA氏などと異なり、K氏は日記の様々な箇所ですべて日本論・朝鮮論を記していた。それは彼が故郷を離れ日本人に囲まれて生活していた状況からも来ていただろうし、戦時期において否応なく「日本」という存在が強烈に迫ってきていたからでもあっただろう。

まず、より生活に根ざした側面から見ておこう。京都で日常的に異文化に触れる K 氏にとっては、常に比較文化論を展開せざるを得ないような状況にあった。例えば日本の葬式で祭壇に線香をあげ、水を替えるのを見て、「儀式風俗が内地と朝鮮と大概同一」であると評価したうえで、その違いについては内地の方が「西洋の文明が輸入された丈である」(K400723)と西洋文明の受容度を軸に比較している。K 氏の比較文化論のなかで、しばしば表れていたのは食生活のことだった。少し慣れてきた頃に、「内地食のおかずは簡単に一種しか無いが僕はそれが美味しいのだ」など文化相対論者のように書くこともあったが (K400727)、そのうち「朝鮮の料理は美味しい。まるで内地の料理はなってをらぬ。滋養が全然ない」と朝鮮料理に軍配を上げることになった (K421104)。

こうした K 氏の比較文化論の評価軸には、近世朝鮮に由来する思想も影響していたと考えられる。たとえばお粥について、「我が国 (朝鮮) のお粥は美味しいが、蝦夷達の炊いた粥はちっともおいしくない。米が全部溶けてしまって、形を留めない位まで掻き回して炊くのである」と論じているように (K420520)、華夷秩序に基づく「蝦夷」との表現で日本人を評価している。日本語で「蝦夷」といえば、北海道および東北地方の人々、特にアイヌを指し示すのが一般的だが、ここではおそらく朝鮮語の「オランケ (오랑캐)」の翻訳語として用いられているものと思われる。「オランケ」は、歴史的には女真族の蔑称であり、そこから一般的に「夷狄」といった言葉と同様に異民族を見下げた呼称として用いられてきたが、その視線が日本人へと向けられていたのは興味深い。もっとも K 氏が常に日本人を「蝦夷」と表現していたわけではなく、主に日本人を腹立たしく思った時にこうした表現が出てくるのであった。たとえば、丁稚をしていた時代に寝坊して喧しく言われたときにも、「実際、蝦夷族の日本人は小言の多い癩癩の奴等だ。細い連中だ」(K420513)と、相手を小さく見るような視線で批判の言辞を書いた。K 氏の祖父は一族の族譜の編纂や齋室の改築

などに主導的に関わっていたことから（K430208, 09）、嶺南地方の朱子学の伝統を強く受け継いでいたと考えられる。K氏もその薫陶を少なからず受けていたであろうし、故郷の父母や祖父への強い思いにもその思想的影響があったと考えるべきであろう。だから家族秩序に関しては、「夷達は夫婦だけ、親子を考へず。兄弟も誠に情の疎かな所あり。噫我が朝鮮の美風を弘めかしかな」と（K400830）、儒教的な価値観をベースに日本社会を評価していた。日本の現代風俗に関して、「現には流行性服装が非常に乱雑してゐる。風紀が大変乱れて来た」と、儒者のように眉をひそめていたのもそのためであろう（K410804）。

K氏が日記に書き留めた日本論・朝鮮論はこうした比較文化論にとどまるものではなく、政治思想ともよべるものも展開されていた。もちろんそれは一貫した政治思想ではなかったが、時局に関わってその都度書いていた彼の議論のなかから、一定の傾向を読み取ることは可能である。彼の日本論・朝鮮論の特徴をあえて一言でいえば、「大東亜戦争」における大日本帝国の「躍進」ぶりを賞賛する一方で、民衆生活を圧迫する戦時統制には大いに不満を抱き、さらに日本の朝鮮統治は辛辣に批判するというものであった。この一見矛盾した政治思想のあり方を彼の記述に即して検討してみよう。

まず、K氏の日中戦争の評価は「大東亜戦争」全体の評価に混ざってしまっていて抽出が難しいが、太平洋戦争についての態度はかなり明確である。真珠湾攻撃の報道に際しては、「帝国は茲に止むなく東亜、否、世界新秩序建設のスタートを切ったのだ」と記し（K411208）、ハワイ戦を「喜しきことなり」と評価している（K411210）。ラジオに聴き入っていたこの日のことを、1年後に「あの時、我等は血湧き肉躍るのを禁じ得なかった」とも回想している（K421208）。その後も大本営発表に接しながら、「征く所全勝の勢ひで進む皇軍に対しては満腔の謝意を表する」といった調子で評価している（K420608）。

こうした認識は、K氏が欧米列強による植民地からの解放という当時のプロパガンダに彼なりの立場から呼応していたと考えることができる。彼はたとえば「印度人の印度」というスローガンには共感しながら「英よ、日本の実力を見くびったのか」と記しているし（K420409）、ガンジーの断食のニュースを読んで、「ガンジー死すども独立精神は死せず!!」とも書いている（K430224）。また、「元気百倍、大東亜建設。有色人種十五億の爲めに何が何でも此一戦はやりぬかねばならぬ」とあるように（K420910）、この戦争を人種戦争の枠組で認識していた。そのことはこの戦争によって世界のなかでの朝鮮の地位が上がることへの期待とも結びついていたようである。朝鮮人の友人と夜語り合った後の日記では、「祖国は我等の青年の力に依って大東亜の盟主、否、世界の盟主として雄々しくも出立つ出来るのだ。[...] 青年よ!! 起てよ!! いざ起てよ!!」と書いている（K430414）。

だが、K氏はこの戦争に全面的に賛同していたわけではない。たとえば朝鮮人への徴兵制実施には反感をもっていた。1942年5月、1944年から朝鮮人を対象とする徴兵制が実施されることが閣議決定されたが、このことを知ったK氏は、「中学を出たら二十一才で丁度適齡だ。さうすると勉強も嫌になり精も出ない。或る時は癪に障る事ある。何ていふ事をしやがるんだ。俺等は朝鮮国民だ。何で彼等の指図を守らねばならぬか」と歎いている（K420923）。その翌日にも朝鮮人青年特別訓練に関する制令のニュースを聞いて、「蝦夷どもに指図せらるる」ことを憂い、「彼等は我等を一未開人と見て如何なる侮辱を加へて来たか」と日本人による差別に対して批判した（K410924）。この頃、内務省警保局は徴兵制実施に対する在日朝鮮人の意向を極秘で調査し、その主張を「感激し聖恩に応へ奉らんと云ふもの」「権利を主張し或は事実を歪曲せるもの」「民度を向上せしめ然る後実施すべきなりと為すもの」に分類している³⁰。そこでは差別撤廃のために

³⁰ 内務省警保局『昭和十七年中に於ける社会運動の状況』1943年、857～865頁。

義務教育実施を求める主張や、時期尚早論はあるものの、K氏のように日本人に指図されて戦場へ行くことに抵抗を示す声は拾えていない。官憲の調査には表れてこないような言葉をK氏は日記に書きつけていた。

また、戦時統制による食料品不足に対してもよく不満を書き連ねている。豆腐屋の前に人が並んでいるのを見て、「人間が食ふ物に対して何故あゝいふ苦勞をせねばいかないだろうか。政治はあれてよいだろうか。」とか（K411025）、「いくら節米と言っても無理過ぎると思ふ。生命の糧を斯くも引締めては続くことではないと思ふ。もう少し局に当る物は考えて欲しい」といった政治批判も書いている（K420312）。

より重要なのは、大日本帝国の戦争の大義名分は評価する一方で、日本の朝鮮統治に関してはほとんど評価するところはなく、むしろ辛辣に批判していたことである³¹。たとえば、彼は朝鮮の「施政記念日」に、「あの時何故日本と一緒にならねばならなかったのだらうか。彼の時反対して独立を護ってみたら我々は大層よかったのに」と書いている（K411001）。また、日本はかつて「朝鮮から諸文化を取入れたものであった」のに、「今は反対に夷達から支配されて」おり、「憐れむべき」ことだと歎いている（K420219）。特にこうした筆致は故郷の農村を想起したときにより強まった。「半島は悪魔の手に。農家では、否、全民が苦しんでゐること、腹腸のちぎれる思ひがします」とか（K420528）、「我が朝鮮の白米」を「此処の人間に食はせるのかと思ふと胸の裂けるやう」だとも書いている（K420624）。

こうしたK氏の植民地朝鮮論は、1942年2月の一時帰郷中に書いた日記の記事に集中的に表れていた。彼は「汗を流して作った所の粃は食糧もろ

³¹ただし南次郎総督に対しては、「夙に親しまれた半島の親」であると表現するなど好意的に記している（K420617）。その他、近衛文麿や立命館の創始者である西園寺公望などについても好意的な表現をしている。K氏は偉人伝に傾倒することがあったが、その一環だったのかもしれない。だが、そうした人物評とここで論じている政治思想とどう関連づけられるかは今後の課題としたい。

くに残さないで供出を申込まれる等、阿呆らしくて農業は出来ない。だから今、村中の青年達が果して何人あるか。本村から見れば既に八人も炭鋤の募集に行ってしまったのだ。北海道や或は九州等」と、供出と労務動員との関係を構造的に把握している（K420214）。また供出について「斯く厳に自由を束縛すれば続かぬと思ふ」と統治の限界についても語った（K420218）。歴史観や「内鮮一体」論に関連しても、次のように厳しく日本を批判している。

日本の歴史には朝鮮が内乱に如何とも出来ず倒頭合併したと。然し日本は強制的に我朝鮮を奪ったのだ。見よ。我が五百年の燦然たる歴史を。君は民を慈しみ遊び、民は忠を致した此の山川草木を。今は日本の蝦夷の手に斯くも引づられてゐるのか。惨憺たる有様よ。汝よ、我が高麗を知らずや。（K420220）

小学校には全然朝鮮の歴史は授けない。そして日本のよいやうに書いた所の国史だけ之を教授に喧しく言ひ、専ら自分の得する外はない。国民の親和を図る目的で表面は内鮮一体と叫んでも、其の奥には我が半島の人を、恰も一階下の如く見るもさへあるやうだ。それは半島に於ではないが内地で其の著しい例が見付けられる。〔…〕 実に腸のちぎれる思ひがするのであった。日本人全体が敵視されて蹴飛ばしたくなったのであった…。（K420221）

K氏は、さらに故郷の父母に宛てたメッセージの形式で、朝鮮の独立を求める文章も日記に書き残している。

故郷の父母よ、お元気ですか。之の国乱の中に如何にお暮しなさるや。平和な優長な昔の世はもう来ないのでせうか。ああ、平和な時もあったのに、それも私達にとっては束の間、今や国家主義の非常時体制下

制圧され、煩に生活困難なる今の乱世に、彼の役人達の強制的な悪魔の手に操れる我が朝鮮同胞よ、起て!! 今に躍起するぞ! 我が李朝二十八王様の治績を身よ。燦と輝くではないか。それを彼の明治年間に蝦夷民族に奪はれたのではないか。半島同胞よ反省せよ!! (K420603)

官憲による各種の「流言蜚語」関連資料をもとに卞恩眞が明らかにしているように、「内鮮一体」論が必ずしも差別の撤廃をもたらさない虚構であったことを当時の朝鮮民衆は看破していた³²。たとえば1941年に東京の朝鮮奨学会で開かれた錬成会で朝鮮人学生に「平素の学生の抱持する気持ち」を語らせたところ、「内鮮一体」批判を含め「民族的に相当尖鋭なるもの続出」して当局を慌てさせたことがあるが³³、K氏もまた差別する日本人を「蹴飛ばしたく」なるような思いを抱いていた学生の1人であった。それも朝鮮王朝の歴史の観点から論じ、「蝦夷民族」からの独立への思いまで吐露している点の特徴的である。

では、こうした日本の朝鮮統治への批判と、先に述べたような「大東亜戦争」へのK氏の呼応とはどのように両立するのであろうか。日記にはそれに対する答えが書かれていないため、ここから先は推察するしかない。そのための参考事項として注目しておくべきことは、満洲事変の主導者だった石原莞爾を中心に展開されていた東亜連盟運動に、1940年から約2年間にわたって京都の朝鮮人留学生の一部が関わっていたことである。これは

³² 卞恩眞「일제의 식민통치논리 및 정책에 대한 조선민중의 인식 (1937-45)」『한국독립운동사연구』14, 2000年、320~328頁。

³³ 「在京朝鮮人学生の懇談会に於ける特異言辭」(『特高月報』1941年10月分、朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第4巻、三一書房、1976年、763~765頁所収)。たとえば、中央大の学生は「差別待遇に対する気持の爆発」を語り、明治大の学生は「日本人に大和魂があれば朝鮮人にも同じく魂がある今更内鮮一体を説くことが間違ひである」と言い、日本大の学生は「内鮮一体」を語りながら監視に来ている警察官に「朝鮮人と見たら泥棒と思ふ事は如何か」と釘を刺した。

「満洲国」の統治理念だった「民族協和」思想などを日中関係に適用し、日中戦争の停戦、東亜諸民族の連盟を形成することで「世界最終戦争」に備えようとする運動であり、石原が一時期住んでいた京都は同運動の一大拠点であった。この運動に関わった朝鮮人の思想と行動を検討した松田利彦は、民族的自覚をもった留学生のなかから東亜連盟運動のもっていた朝鮮統治批判論に共鳴し参加していった者がいたが、東亜連盟論が朝鮮人差別批判論と朝鮮独立否定論（日本国内での自治）の2つの方向性を内包していたため、共鳴者のなかでも後者に傾いて民族意識が取り込まれていく中心人物らと、朝鮮独立論をめぐる対立を認識せざるを得なかった多数派との二重構造ができあがっていたと論ずる³⁴。K氏がこの運動に参加していた形跡はない。ただ、対欧米の「大東亜戦争」に対する一定の共鳴と、朝鮮統治への痛烈な批判という点において、運動の多数派がもっていた志向性と相通ずるものがあるのは確かである。この一見矛盾する2つの評価の間に共通項があるとすれば、それは「植民地」をめぐる認識ではないだろうか。欧米の植民地支配からアジア諸民族を解放するとの大義名分を掲げながらも、日本が朝鮮や台湾などから自主独立を奪って植民地支配し続けているという大東亜イデオロギーの大いなる矛盾が、K氏の記述から滲み出ていると思えてならない。

おわりに

以上、一個人が書いた4冊の日記をもとに、戦時下の大日本帝国のある経験の軌跡を追ってきた。K氏の経験は、京都という宗主国の都市空間だ

³⁴ 松田利彦「曹寧柱と京都における東亜連盟運動：東亜連盟運動と朝鮮・朝鮮人（二・完）」（『世界人権問題研究センター 研究紀要』第3号、1998年）。なお、曹寧柱も禮泉の出身であった。

けでも、禮泉という故郷の空間だけでも切り取り得るものではなく、少なくともその両者を同時に見る視点によらなければ叙述し得るものではない。K氏の故郷への想いは、故郷の家族のK氏への想いとも重なっている。K氏日記の最後から2番目の記事を引用しよう。

午前に入上、母上様の御手紙の返信が届いた。早く繙いて奉読すれば、祖父様が御病気でいらっしゃるとのことだ。〔…〕そこで私を就床の間から見たい〜と仰言ってみられるらしい。無理もないことだ。私一人の孫を遠く離しておいて、家には一人も祖父に孝養を尽してゐるものはないから御心淋しいのも当然であらうと思ふ。(K431215)

本稿の冒頭で梶村秀樹による「国境をまたぐ生活圏」との表現を引いたが、彼はそれを「国境をまたぐ生活意識空間」とも言い直している³⁵。病床からK氏を想う故郷の祖父の姿を、K氏が京都で想像して書いたこの日記のくだりは、彼がどのような「国境をまたぐ生活意識空間」のなかに生きていたかをよく示しているし、彼が思い描いた「朝鮮」や「日本」は、そうした彼の生活意識空間から理解すべきものなのであろう。梶村のこの指摘は、1945年以降の在日朝鮮人がもっていた定住外国人への志向性を歴史的に説明するために導入されたものである。もしK氏がこのまま日本に残って暮らし、在日朝鮮人1世となった場合、彼もおそらく日本に住みながら故郷を想う定住外国人の1人になったであろうと私は推察する。だがK氏の場合、この後間もなく京都を去ることになった。祖父の病の報せを受けて帰郷したところ、実は仮病であったが、そのまま京都を引き払ったと言いつづられている。確実ではないが、上記の手紙がその仮病の報せだったのかもしれない。いずれにしてもK氏の場合は幸いにも離散家族

³⁵ 梶村・前掲「定住外国人としての在日朝鮮人」18頁。

化することなく、その後はずっと故郷で暮らすことになった。京都滞在時代のK氏の日記は、ひょっとすると彼自身もその後の激動の時代を生き抜くなかで忘れてしまったかもしれない、「海峡をこえて在日すること」の生活意識空間を鮮やかに描き出していた。

このように、1人の人物の経験を追うことは、決して歴史叙述を「狭い」領域に閉じこめることにはならない。なぜなら、どのような個人も無数の人間関係を横切りながら世界史を生きているからである。そうした信念をもってK氏の日記を読み解いたが、結果的に、地理的には日本と朝鮮半島にまたがり、時代的にも日記が書かれたよりもずっと以前の歴史を含み、目の前で起きたことから夢の中までを含む「広い」経験が浮かび上がったと思う。それは従来の歴史研究が専門分野別にバラバラに描いてきたことをつないでいく、「下」からの全体史の試みでもある。